おとうと (1)

（小学五年生の「少年」には、小学校に入学したばかりの弟・アツシがいます。アツシは目の手術を受けるために入院する予定です。入院の前日の日曜日、「少年」はアツシから「海に行きたい」と言われました。）

【バスを乗り継いでも一時間以上かかるので、海までは行けない。そのかわり、海を見られる場所に連れて行くことにした。商工会館の屋上からだと、街並みの先のほうに、海が見える――かもしれない。】

「でも、わかんないぞ、見えないかもしれないぞ、それでもいいよな、文句言うなよ」

出がけに一度、信号待ちのときにもう一度、①念を押した。自信はない。商工会館は山の中腹にあるので見晴らしはいいはずだが、海まで見えるかどうかは確かめたことがないし、だいいち屋上に上ったことだってないし、今日は曇り空で、少し霞んでもいて、アツシの目で海と空を見分けられるのか、わからない。

信号が青になる。少年はハンドルを強く握り直し、ペダルを踏み込んで、言った。

「もしも海が見えなくても泣いたりするなよ。泣いたら置いて帰るからな」

泣かないって、と笑うだろうと思っていたのに、アツシは「うん……」と低い声で言った。

「おっきな声で返事しろよ」

「……はい」

今度は、高いけれどか細い声になった。泣きだしそうな声でもあった。少年はもうなにも言わない。黙ってペダルをぐいぐいと踏み込み、サドルからお尻も浮かせて、自転車のスピードを上げていく。

アツシがメガネをかけるようになったのは、幼稚園に入る前だった。健康診断で視力が悪いことがわかり、病院で検査を受けて、メガネをつくった。ほんとうはその時点で手術も勧められていたのだと、あとになって――両親が手術を決断してから、聞いた。

ずっと足手まといだった。少年が団地の友だちと遊ぶとき、アツシは「ぼくも、ぼくも」と仲間に入れてほしがった。でも、仲間に入ってもいつも「おみそ」扱いだった。歳が四つも下だし、すぐにけつまずいて転んでしまうし、ボールの転がる方向や距離がうまくつかめないので、サッカーやソフトボールの球拾いさえまともにできない。

②そんなアツシを見るたびに、いらいらした。友だちがメガネをからかったり、目の悪さのせいでいじめたりしたことはなかったが、気をつかわれているのがわかるから、嫌だった。アツシと一緒にいると、なんだか自分まで「弱いほう」になってしまうようで、まだ遊びたがっているアツシを無理やり帰らせて、泣かせてしまったこともある。

かわいそうなことをした。いまは思う。いまだから思う。もっとたくさん遊んでやればよかった。キャッチボールの相手をせがまれたとき、どうせアッくんには無理だよ、と断るのではなく、たとえボールを後ろにそらしてばかりでも付き合ってやればよかった。

（重松清『小学五年生』文藝春秋　所収「おとうと」による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)【　】の箇所（かしょ）について、正しく述べたものを選びなさい。

ア「少年」の視点から、状況（じょうきょう）や心情が語られている。
イ アツシの視点から、状況や心情が語られている。
ウ 第三者の視点から、登場人物を客観的に語っている。

〔　　〕

(2) 本文中では、過去を回想している箇所がある。回想が始まる箇所の最初の五字を書きぬきなさい。

□□□□□

(3) ――線①「念を押した」とあるが、「念を押す」の意味を選びなさい。

ア 願いがかなうように、必死でいのる。
イ 思い通りにならず、気落ちする。
ウ 重ねて注意し、相手に十分に確認（かくにん）する。

〔　　〕

(4) ――線②「そんなアツシを見るたびに、いらいらした」とあるが、どのようなことに対していらいらしたのだと考えられるか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 足手まといになってしまう弟のために、友だちから仲間に入れてもらえないこと。
イ 友だちと遊ぼうとしても、目が悪く、うまく遊ぶことができない弟のことで気をつかわれること。
ウ 弟が友だちからからかわれたりしないように、いつも気を張っていないといけないこと。

〔　　〕